

文段認定の一基準（Ⅱ）： 接続表現の統括

著者	佐久間 まゆみ
雑誌名	文藝言語研究. 言語篇
巻	17
ページ	35-66
発行年	1990-01
その他のタイトル	Criteria for Structural Analysis of Grammatico-Semantic Paragraph Bundanin Japanese Discourse (Ⅱ) : Coherency of Connectives
URL	http://hdl.handle.net/2241/13547

文段認定の一基準(Ⅱ)

——接続表現の統括——

佐久間 まゆみ

1. 文段の統括と接続表現

言語表現の最大のまとまりである文章を直接に構成する要素は何かという問題については、時枝誠記(1950)による文章論の提唱以来、様々に論議されてきた。拙稿(1986・1987a)においても、いわゆる改行による「段落」とは別に、内容上のまとまりとして他と相対的に区分される「文段」¹⁾を文章の成分として考える立場から、その客観的な単位認定のための基準の一つとして、「提題表現の統括」²⁾機能という観点を設けて、文段区分の実例を分析した。しかし、種々の「文脈展開の形態」³⁾の中から、提題表現のみに着目して、文章構造を論じようとするには、自ずと限界があるのも自明のことである。

そこで、本稿では、その延長線上にある課題として、新たに「接続表現の統括」機能という観点を設け、文段の成立を判定する際の手がかりとしての可能性を検討する。「接続表現」とは、従来、文章論の領域では、「接続語句」⁴⁾と称されたものであるが、主として文や節をつなぐ働きをする「接続詞」「接続助詞」「接続連語」等の総称である。「連文」と呼ばれる2文以上の文の意味的なつながりに関しては、「文の接続関係」⁵⁾の類型が整理されており、諸説見られるが、ここでは、さらに永野賢(1986)による「文の接続関係による統括」の観点を導入して、文段の成立について考えることにする。

「文法論的文章論」⁶⁾を提唱する永野は、文章構造を分析するに当たって、言語形式の手がかりを重視し、「接続論」「連鎖論」「統括論」という三つの観点を設けている。最後の「統括論」は、「接続論」と「連鎖論」を総合して把握されるものであるが、文段の成立を論じる上で、最も重要な観点となる。

統括の定義 ○「統括」とは、文章を構成する文の連続において、一つの文が意味の上で文章全体を締めくくる段割を果たしていることが言語形

式の上でも確認される場合、その文の意味上形態上の特徴をとらえて文章の全体構造における統一性と完結性とを根拠づけようとする文法的観点である。(p. 315)

永野は、統括機能を果たす言語形式が文章中に占める位置の違いによって、次の5種の統括方式を立てているが、これは統括機能を担う「中心文」の出現位置による文段の構造類型と重なるものである。本稿では、以下、() 内に記した略称⁷⁾を用いる。

- (1)冒頭統括(頭括式) (2)末尾統括(尾括式) (3)冒頭末尾統括(両括式)
(4)中間統括(中括式) (5)零記号統括(零括式) (p. 316)

永野の「統括論」の中で、特に「文章の統括」を「全体的統括」と「部分統括」に分けてとらえる「統括の重層性」⁸⁾の観点は、段落や文段の本質と密接に係わる問題である。

一つの文章は全体として一つの文(ないし段落)によって統括されると同時に、部分として統括されているものを含む場合が少なくない。(省略)

部分統括の主たるものは段落であるが、すべての段落が一つ一つ必ず統括されているというのではなく、零記号の段落があることはもちろん、いくつかの段落が大段落として統括されているものがあるのも、これまた当然である。(p. 318)

永野は、「形態的に明白な統括機能を持つ文で締めくくられている場合」、段落の文章としての独立性が強いとしている。ある種の段落に「統括機能」を認めてはいるが、「文章の成分」としては「客観的な文脈としての段落(改行段落・小段落)」を主張している。

また、市川孝(1978)に代表される「文段」の考え方を、“形態”よりも“内している。容重視”の、「筆者の意向を無視する」恣意性の強い一種の観念論として批判「しかし一方、段落の切れ目と言うものに客観的な基準がないことも明白な事実である。」ことも認めており、この問題を「改行」の実在性からのみ説得するのは、やや無理があるように思う。

これに対して、筆者は、文章の成分としての「文段」の恣意性を可能な限り排除するために、言語形態的指標から文段の認定基準を設定しようとしている。「文段」の概念規定については、市川説を踏襲するものの、改行の悪しき文章の場合にのみ「文段」の区分を適用するのではなく、あらゆる文章(・談話)の構造分析の基本的単位として考える⁹⁾。

2. 接続関係による統括方式

永野は接続論にかかわる「位置による統括」の原則を次のようにまとめているが、本稿では、「文段」の認定基準としての妥当性を検討することが目的である。

- (1)展開型・反対型・累加型……………末尾統括（尾括式）
- (2)同格型・補足型……………冒頭統括（頭括式）
- (3)対比型・転換型……………零記号統括（零括式） (p. 327)

ただし、「累加型」と「転換型」については、本文中に異なる統括方式の指摘がある。

(3)累加型 本質的には全体として「零記号統括」として考えてよい。しかし、展開型と同様、最後に統括機能を持つ文が置かれる可能性も強い。

(7)転換型 本質的には統括と関係がない。しかし、転換型の接続がいくつかの文接続の冒頭に置かれるか、中間に置かれるか、末尾に置かれるかによって、「冒頭統括」にも「中間統括」にも「末尾統括」にもなる可能性がある。 (p. 321～2)

ここでは、1)永野の文の接続関係の妥当性、2)文段の中心文による統括方式の妥当性、3)文章の構造類型から見た妥当性、という3点を検討する。

永野は、接続表現の種類と同じ7種の接続類型を立てているが、これらの中では、「展開型」の規定がゆるく、やや曖昧な接続関係である。「前の文の内容を受けて、後の文でいろいろに展開させる関係」という定義の後に、例(1)～(3)の連文の例¹⁰⁾がある。

- (1)明け方から雨が降りだした。雨は、夕方までやまなかった。
- (2)丘の上に、赤い屋根の建物が見えるでしょう。あれは、わたしの卒業した小学校です。
- (3)ぼくは、粉薬を飲むのがへたです。だから、いつもオブラートを使うことにしています。 (p. 105)

この3例は、いずれも異なる接続関係ではないかと思う。(3)は「ダカラ」という接続表現があり、前文と後文で因果関係を述べているが、(1)は時間的に連続する出来事を並べており、「ソシテ」という接続表現を想定して、「累加型」とするほうがよい。一方、(2)は接続表現は用いずに、後文の「アレ」という指示語によって続けられたもので、(1)や(2)とは異なる接続関係を示す。この3例は種類の違う接続関係として考えたい。3例の共通点は、いずれも後文の統括

力が強い「尾括式」の類型だということである。また、前後2文の話題が同じものだという特徴もある。これらの連文が文段として成立しているかどうかは、その前後の文脈に照らしてみなければ何とも言えないが、後文に「一ハ」という提題表現や略題表現があるから、一応文段としての資格を備えている。連文と文段の相違は「統一性」の程度の違いだといわれるが、実際には相対的な統括力の程度の見極めは難しい。まして、2文のみから認定することは、自ずと限界をはらんでいる。したがって、先に問題にした「累加型」と「転換型」の統括方式も、一概には定めにくく、本文中の記述のような複数の方式も考えられるように思う。

永野は、3文以上の接続関係として、「飛石型」と「積石型」を挙げているが、例(4)～(6)は、いずれも「一ハ」という提題表現を持つ中心文を含む文段として成立しており、(4)(5)は尾括式、(6)は頭括式の統括方式を示している。

(4)①船が波止場を離れた。②港の空には、カモメが幾羽も飛びこっている。③船は白波をけて進んだ。

(5)①姉の名は照子という。②妹の名は道子という。③ふたりは、ふたごである。

(6)①問題点は二つある。②一つは経費の問題である。③一つは時間の問題である。

(p. 108)

文の接続関係は、(4)の文①と③は「累加型」であるが、これらの文の間に挿入された文②も、文①や③と、「転換型」というより、「累加型」で接続している。こうした時間的連続は、一番最後に来る文が統括することが多く、尾括式になる。(5)は文①と②が「累加型」でまとまったものを、文③が「ふたりハ」という提題表現で受けて解説している。これは、接続表現の入らない連文で、「連鎖型」¹¹⁾と呼ばれるものである。(6)は、文①であげた話題の具体例を、文②と③の「累加型」による連文に挙げる頭括式である。

永野は、接続論による統括方式を段落の構造に適用しているわけではないが、中心文の位置による分類を考える際のかんがりの手がかりとなる。文の接続関係を適用して、段落の分析をする試みは従来もなされてきたが、統括方式との関連を導入するものはあまりなかった。永野は、さらに「連鎖論」による統括方式にも言及しているが、中心文や段落の構造類型との関連性はあまり触れられていない。拙稿(1987a)における「提題表現の統括」という観点は、永野の「主語の連鎖」の考え方を「文段」の問題として発展させたものであ

る。

3. 文間文脈の緊密度による文段の成立

3.1. 文の接続関係による文脈の緊密度

文段の成立にかかわる文間文脈の距離の大小が特定の文の接続関係によって定まっているという見方がある。市川(1978)は、文段の客観的な認定基準の有無について、「転換型」と「補足型」という文の接続関係の示す文間文脈の距離の違いから論じている。

大切なことは、やはり、文ないし文集合の間の距離の大小、内容相互の親疎という点であると見られる。この、距離の大小などというものは、量的に正確にはかりうるものではないし、また、論理的文脈とは違った情緒的ないし心理的文脈では、その関係は一層複雑でとらえにくいものとなる可能性が強い。しかし、一般的な文脈においては、距離の大小の一応の基準を立てることは必ずしも不可能ではないと思う。

たとえば、「転換」する箇所は、たいてい大きな文段の切れ目となると考えられる。(省略)「転換」の文は、前件(前に述べられていることがら)に対する、内容上の距離が大きいからであると考えられる。

これに対して、後件が前件に依存し、それを明確にするための、「補足」の文などは、一般に、前件との距離が小さく、したがって文段の切れ目を形作することは少ない。(p. 147~8)

市川も、文の接続関係の基本的類型として、8種類を立てているが、先の永野の類型との違いは、「連鎖型」という接続表現の入らない接続類型を加え、「順接型」の範囲を因果関係中心にしばった点にある。[表Ⅰ]は、市川の接続類型を表の形にしたものであるが、筆者が整理した文の接続関係の図式化の符号とともに示した。

市川は、「補足」が一文ですまず、いくつかの文集合と連合するような場合は、前件との間に距離が生じ、「補足型」が文段の切れ目になる可能性についても触れている。「文段の群化(グルーピング)」という現象によって、相対的に文間文脈の距離が定まることを踏まえたものである。これは、すなわち、同一の接続類型であっても、常に文段のどの位置に来るかが固定しているわけではないことを示す。

一方、西田直敏(1986)は、「文章展開における先行文から後続文への文脈の

〔表Ⅰ〕 文の接続関係の基本的類型（市川1978：89～93参照）

類	接続類型	下位区分	主な接続表現の例
A 論理的 結合関係	1. 順接型 ＝前文を条件とする帰結を後文に述べる。 ①→②	①順当 ②きっかけ ③結果 ④目的	だから・ですから・それで・したがって・そこで・そのため・そういうわけで」それなら・とすると・してみれば・では（仮定的な意） すると・と・そうしたら かくて・こうして・そのけっか それには・そのためには
	2. 逆接型 ＝前文の内容に反する内容を後文に述べる。 ①Z②	⑤反対、 単純な逆接 ⑥背反・ くいちがい ⑦意外・ へだたり	しかし・けれども・だが・でも・が」といっても・だとしても（仮定的な意） それなのに・しかるに・そのくせ・それにもかかわらず ところが・それが
B 多角的 連続関係	3. 添加型 ＝前文の内容に類することを後文に述べる。 ①+②	⑧累加、 単純な添加 ⑨序列 ⑩追加 ⑪並列 ⑫継起	そして・そうして ついで・つぎに それから・そのうえ・それに・さらに・しかも また・とどうじに そのとき・そこへ・つぎのしゅんかん
	4. 対比型 ＝前文と比較対照する ①↔②	⑬比較 ⑭対立 ⑮選択	というより・むしろ」まして・いわんや いっぽう・たほう・それにたいし」ぎゃくに・かえって」 そのかわり それとも・あるいは・または
	5. 転換型 ＝前文から転じた別の内容を後文に述べる。 ①↓②	⑯転移 ⑰推移 ⑱課題 ⑲区分 ⑳放任	ところで・ときに・はなしかわって やがて・そのうちに さて」そもそも・いったい それでは・では ともあれ・それはそれとして
C 拡充的 合成関係	6. 同列型 ＝前文を言い換える。 ①＝②	②反復 ②限定 ②置換	すなわち・つまり・ようするに・かんげんすれば・ いいかえれば たとえば・げんに」とりわけ・わけても」 せめて・すくなくとも （肯定と否定の置き換え）
	7. 補足型 ＝前文の補足を後文に述べる。 ①←②	②根拠づけ ②制約 ②補充 ②充足	なぜなら・なるとなれば・というのは ただし・もっとも・ただ なお・ちなみに （倒置的形式）
	8. 連鎖型 ＝前文に直接結び付く内容を後文に述べる。 ①－②	②⑧連係 ②⑨引用関係 ②⑩応対 ②⑪提示的表現との連鎖	（解説付加・見解付加・前置きの表現との連係・場面構成など） （他の文と会話文の関係など） （問答形式） 〈独立成分に対する説明〉

進展という視点で、文の接続における緊密性の度合い(緊密度)」を考え、10項目を挙げている。そのうちの8項目は、接続表現を手がかりとするものである。また、最後の2項目¹²⁾は、「段落間の関係」にかかわるものであるとしている。なお、「緊密度」の強さは、項目の番号順になっており、後へ行くほど段落の切れ目に位置する可能性が高いとする。

「緊密度」に関しては、すでに土部弘(1962)の「文の関連様式としての位」による案も出ているが、西田案に対応する市川説の接続類型が複数にわたることから見ても、そう単純に定められるものではなさそうである。西田は、「転換型」については、「文の接続」ではなく、「段落の接続」の問題として扱うべきだという。

3.2. 「接続類型」による段落の機能的分類

文段の成立条件の一つとして、拙稿(1987a)では統括力を有する提題表現の存在を挙げたが、接続表現は外側の方から、提題表現の統括の方向を示唆するものである。接続表現によって示される文の文の接続関係には、文章中の文脈の流れが示されているが、文段とは文間文脈の相対的な距離の大小によって区分されるものだからである。各連文の統括関係の方向を接続表現の組み合わせが示唆するともいえよう。

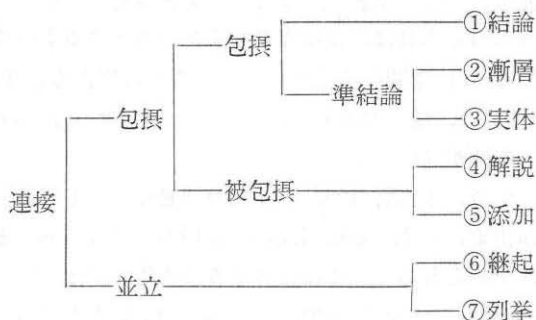
松下厚(1977)の「接続類型」によって設定される「段落の機能的種類」と「成分(文)の機能的種類」の8種類(9種類)も、同様の見地から設定されたものである。ここでは、段落の成立を中心とする「成分」の例のみを挙げることにする。

- | | | | | |
|----------|--------|--------|----------|---------|
| 1. 該当段落文 | 2. 結論文 | 3. 漸層文 | 4. 実体文 | 5. 解説文 |
| 6. 添加文 | 7. 継起文 | 8. 列挙文 | 9. (転換文) | (p. 87) |

松下は、さらにこれらの「位置構造と包摂構造を組み合わせると」、8種の段落の「二者構造」を設定している。

- | | | | |
|--------|--------|--------|---------|
| ①前置・結論 | ②前置・漸層 | ③形式・実体 | ④主体・解説 |
| ⑤主体・添加 | ⑥継起・継起 | ⑦列挙・列挙 | ⑧前置き・転換 |

以上を、接続の結合性の強い順に並べ、「接続の体系図」を作成している。「包摂」と「被包摂」とは、本稿の「統括関係」に重なる観点であるが、松下は、特に「結論・漸層・実体」の3種に包摂性を認め、これらの機能を持つ文を「主題文」と呼んでいる。



(p. 90)

松下は段落の全体構造を文章の全体構造に類似する方法を用いて記述する。

- ① 段落の全体構造を単一段落と分析段落に分ける。
- ② 分析段落を包摂段落と並立段落に分ける。
- ③ 包摂段落を冒頭包摂段落と末尾包摂段落に分ける。

松下は「接続関係は接続語と段落の実質意味が担当する。」としているが、「接続副詞」のような接続語を持つ段落は案外少数であるところから、これを基準に段落の接続関係を考察する方法には問題があると指摘している。

松下の用いた月刊誌『文芸春秋』¹³⁾の約 2100 の段落中、「接続副詞」のある段落は 172 例で、全体の約 9% しかなく、大半は「逆接」のものだったという。だが、これをどのように処理するかについては何も述べていない。

以上の指摘から、文章中に明示された接続表現のみから文段の統括関係を把握することは、もちろん限界があるが、ある程度接続関係の種類による統括の方向性が定まっており、中心文の位置による構造にもある種の傾向があるということがわかる。

3.3. 統括機能の位置による文章・六段の基本構造

塚原鉄雄 (1966a) による「文章構造の基本形式」は、「段落構成の基本形式」と共通の 6 種類を挙げているが、「統合段落」の有無と出現位置から明確に設定されている。「統合」とは、本稿で問題にする「統括」に相当する。

A. 統合型文章

a 1. 二段型

1. 演繹型 冒頭統括 (頭括)
2. 帰納型 末尾統括 (尾括)

a 2. 三段型

- 3. 一元型 中間統括(中括)
- 4. 二元型 冒頭末尾統括(両括)

B. 列挙型文章

- 5. 並列型 零記号統括(零括)
- 6. 追歩型 末尾統括(尾括) (p. 12)

塚原は、「段落相互の基本関係」を、8種類の接続関係から分類している。

①順接 ②解説 ③前提 ④累加 ⑤逆接 ⑥対比 ⑦同列 ⑧転換

塚原は、「段落相互の基本関係は、段落の頭初に位置する接続詞または指示語によって、把握しうる。」とした上で、それらが常に位置するとは限らないこと、また、それぞれの「機能領域」に注意すべきだとしている。塚原の「段落」は「論理的段落」と称する文段に類似する単位であるから、その認定基準として、接続表現や指示語を手がかりにすることが可能だという期待がもてる指摘である。

ここで再び、永野説¹⁴⁾の接続と統括の対応関係について言及しておきたい。永野は、2文の接続関係のみから文章を統括する文がどれかを引き出すことはできないが、「文の接続関係を順次たどることによって」、その可能性をさぐることはできるはずだという。こうした考え方を前提として、段落の接続関係を分析する際に、その段落の主な内容を1文の形に要約する方法を導き出している。しかし、これも十分に客観的な要約といえるかどうかが問題になる。

市川は、永野説の段落の中心的内容の1文要約による文の接続関係の適用について、段落の要約の客観性に疑義を挟みつつも、結論としてはこれを支持している。

段落が思想上、一つのまとまりをもっているならば、その内容を要約して、文の形で表すことも可能になる。とすれば、段落と段落との関係を、文と文との関係に近似させて、文の接続関係を、段落の接続関係に準用することができるはずである。 (p. 128)

段落の中心的内容の把握が、一般に、文の場合に比べて容易でないのは、言語量が大きになると同時に、言語単位どうしの結合がゆるくなるからである。そのような全体を把握し、要約するということは、総合的な読解力にもとづく技能の問題でもあるが、そこには当然、言語上の手がかりがあるはずであって、たとえば、文の接続・配列の的確な把握にもとづいて、中心文を見いだしたり、繰り返し語句をおさえたりすることによって、段落

の中心的内容をかなり客観的に要約する（または、要約文として表す）ことが出来るであろう。 (p. 128~9)

市川説では、段落の内部構造に関して「統括」の観点を導入しているわけではないが、文章全体の構成の形式について、「統括機能」の有無から次の2類5種の類型を設けている。

(a) 全体を統括する(大)段落をもつもの(統括型)。

(ア) 冒頭で統括するもの(頭括式)——全体は二段に分かれる。

(イ) 結尾で統括するもの(尾括式)——全体は二段に分かれる。

(ウ) 冒頭と結尾で統括するもの(双括式)——全体は三段に分かれる。

(エ) 中ほどで統括するもの(中括式)——全体は三段に分かれる。

(b) 全体を統括する()段落をもたないもの(非統括型)。

冒頭・結尾があっても、それが統括機能をもたないもの。——全体は、二段・三段・多段(四段以上)などに分かれる。

ここに「統括」というのは、なんらかの意味で、文章の内容を支配し、または、文章の内容に関与することによって、文章全体をくくりまとめる機能をいう。 (p. 156~7)

4. 文段の中心文の規定

「文段」の成立条件の一つである「中心文」の規定については、拙稿(1986・1987a)でも取り上げたが、まだ十分に明確ではない。「中心文とは、段落における中心的内容(小主題)を端的に述べている文のことである。」とする市川孝(1978)の定義を出発点として、これを文段の成立条件として導入するに際して、「提題表現と叙述表現を備えた文で、周辺の文よりも相対的に統括力¹⁵⁾の強いもの」という新たな観点を付け加えた。

市川は「トピック・センテンス」¹⁶⁾とも呼ぶとしているが、これは、コンポジション理論に由来する実践用語であり、言語学的な意味での検討を経ていない概念であるため、本稿では「中心文」と区別して扱うことにし、国語学的概念として規定した「中心文」という用語を用いた。これは、従来の「トピック・センテンス」に関する指摘が参考にならないという意味ではなく、むしろ先行の諸説を手がかりに、中心文の特徴をより明確なものにすることができるのではないかということである。

樺島忠夫(1983)による「キーセンテンス」¹⁷⁾のリストは、中心文のある種の

ものと重なる項目を多く含んでいる。「その項目あるいは、次の項目がどんな意図で書かれるか、要旨は何かを示す(あるいは暗示する)文で、しかもそれを表すカタチをそなえた文」と規定される「キーセンテンス」としては、次の5種の文が挙げられている。

1 内容をまとめて述べる文

つまり、要するに、まとめて言えば、結局、要約すると、すなわちを頭に持つ文。

2 問題提起と結論を含む文

なぜ…か、…が問題である、問題は…である、…を考えてみよう、などを持つ文。

3 筆者の意見を表明したり、他に対する要望を表したりする文

…と思う、…でありたい、…ほしい、…は当然である、…に期待したい、…が望ましい、…ねばならない、…は言うまでもない、…は否定できない

4 定義・命名を行う文

…を…という、…とは…のことである、…を…と定義する

5 例示の「例えば」「例を示す」などの表現の直前に、何についての例示かを示す重要な文がある。それを抽出すると、それがキーセンテンスになる可能性がある。(p. 155)

このほか、説明文から抜きだした「キーセンテンス」の例として、「仮説提示、導入、理由・原因説明、疑問提示、意義を説く」等の項目を挙げている。樺島はまた、「文脈の切れ続きを示すキーワード¹⁸⁾」として、「まず」「次に」「それから」といった接続表現の類を挙げている。1に挙げた、文頭に用いられる「つまり、要するに、まとめていえば、結局、要約すると、すなわち」等の接続表現の類もキーワードの一種と考えられる。

ここで、中心文と接続表現との関係が問題になる。つまり、接続表現のある種のものは、キーワードとして中心文のなかに含まれる傾向があるということである。ここから、接続表現の有無が文段の認定基準の一つとなる可能性が出てくる。市川が文段の切れ目をとらえるための目安として、文間文脈の距離の大小の一応の基準を示す「転換」と「補足」の連接関係の文を挙げていることから、これは、当然予想される。

5. 文の接続関係と文段の統括

5.1. 中心文の位置による文段の統括関係

統括機能を持つ文の連文中の位置による類型は、森岡健二(1969)による段落のトピック・センテンスを置く位置の分類を参考にすることができる。森岡は、主として1950年代の米国のコンポジションの考え方を日本語の段落に適用し、「段落の統一」を論じた。

段落は、小主題によって統一される必要があり、それは一つの文、つまりトピック・センテンス(小主題文)に要約されるものでなければならない。

(p. 118)

「トピック・センテンス」とは、段落の小主題を表し、その段落に含まれるあらゆる文集合の内容をとりまとめる力のある文である。一つのパラグラフの中でのトピック・センテンスを置く位置の可能性として、森岡は次のa～cを挙げている。

(森岡説)

(永野説)

- | | | | |
|---------------|-------|-----------|-------|
| a. 最初 | | (1) 冒頭統括 | (頭括式) |
| b. 最後および中間 | | (2) 末尾統括 | (尾括式) |
| | | (4) 中間統括 | (中括式) |
| c. 表面にあらわれぬ場合 | | (5) 零記号統括 | (零括式) |

(p. 118～122,)

森岡は、「最初・最後・中間」の三つの位置を立てているが、このほかにもトピック・センテンスの置かれる位置として、最初と最後の両方(冒頭末尾統括・両括式)、二か所以上への分散(分散統括・散括式)等が考えられる。また、トピック・センテンスを表面に示さない場合も、「中心となるトピックは必ずあるはずだ」としているが、これは永野の「零記号統括(零括式)」に通じる。問題はトピック・センテンスの認定をいかなる基準で行うかであるが、森岡は、これについては特に言及していない。

市川は、「統括のしかた」として、次の2種9類を挙げているが、これは先に挙げた永野の「全体的統括」や「部分的統括」の観点と通じる考え方であるといえよう。永野の「統括の重層性」のとらえ方にこの統括機能の質の違いがかかわっているのではないかと予想される。いうまでもなく、統括の重層性は文章中における文段の機能に直接かかわる重要な観点である。

- A. [集約的統括] (a) 主題・要旨・結論・提案などを述べる。
 (b) 主要な題材・話題について述べる。
 (c) あら筋・筋書を述べる。
- B. [付属的統括] (d) 筆者の立場・意向・執筆態度などを述べる。
 (f) 本題の内容を規定し、本題に枠をはめる。
 (g) 導入として、時・所・登場人物を紹介する。(冒頭だけに)
 (h) 本題に入る前に「まくら」を置く。(冒頭だけに)
 (i) 本題とは対比的な内容を述べる。(主として、冒頭に)
 (j) 本題と関連のある事柄や感想などを、つけたりとして添える(結尾だけに) (p. 158)

この分類には大きく分けて2種類の「統括」機能があり、その中にさらに様々な統括機能が含まれていて、その識別は容易ではない。ここでは、文章全体の構成を考える際の観点として考えられており、先に触れた段落・文段の内部構造や中心文の機能などと全く結び付けられてはいないが、全く別のものというわけではなく、文段の統括機能とみなすことができる。全体と部分という本質とサイズの違いこそあるものの、両者の間には共通の文章展開上の働きが認められる。

市川による2種9類の「統括」機能は、すべて中心文の持つ統括力と重なるものであり、「集約的統括」と「付属的統括」との違いは、おそらく中心文、あるいは文段の統括力の強弱の違いと密接にかかわるものではないかと思う。また、「部分的統括」の中には、特定の出現位置が指定されるものもあることから、これらの統括機能の質の違いは、文段における中心文の出現位置や、特定の統括機能を持つ文段の文章中の出現位置の決定に関与するのではないかと予想される。

本稿では、中心文の成立条件として、相対的に他の文の内容を統括する機能を持つということを考え、具体的にどのような言語形態によってどのような統括力を発揮するのか、また、接統表現の有する統括の種類と文段の構造について考察する。文段の成立の問題を中心に扱い、文章構成の類型や文段の相互関係については最小限に触れるにとどめる。

5.2. 中心文の種類と接続関係による統括方式

拙稿(1987a)においては、すでに「中心文」の問題に言及し、提題表現を手がかりとした中心文の種類を挙げたが、その全体像や文段中の出現位置による統括方式の分類には触れなかった。ここでは、中心文と接続表現の関連性を解明するために、市川(1987)による2種類の中心文を検討する。なお、拙稿(1987a)では、文段の成立条件として「最低一つの提題表現を有する文集合」という規定を加えたが、これは提題表現を中心文の基本構造をなす要素として考えたためである。

市川は「中心文」について次のように定義し、「要約的中心文」と「結論的中心文」の2種を挙げる。

中心文とは、段落における中心的内容(小主題)を端的に述べている文のことである。トピック・センテンスとも呼ばれる。中心文は、どの段落にもあるとは限らないが、その反面、一つの段落に、二つ(以上)の中心文が含まれることもある。(p.127)

〔要約的中心文〕一つの段落の中心的内容を要約的に示している文。繰り返しの部分、付加的な部分を除いてとらえられる。

(7) ①人生において、読書のための時間は、見いだそうとすれば、どこにでもある。②朝出かける前の三十分が無理なら、通勤電車の中の三十分でもよい。③夜眠る前の一時間ぐらいは、その気になれば、だれでも、読書のために用意できる。

〔結論的中心文〕一つの段落の中心的内容を結論の形で示している文。論理の道筋をたどったり、いろいろな説や事実を検討したりした上で、その行き着く先としてとらえられる。

(8) ①毎日の生活が忙しくて、読書の時間がないという。②そして、終日妨げられないで読書できた昔の人がうらやましいという。③しかしながら、どんなに忙しい人も、自分の好きなことのためには、時間を作ることを知っている。④だから、読書の時間がないというのは、読書しないための口実にすぎないのである。(p.127)

いずれの中心文も、「段落の初めか終わりなどに置かれる」とされている。

(7)は、中心文の文①が文②と③を「同列型」として統括する「頭括式」の文段である。文②と③は、「マタ」という接続表現を想定することができる「添加型」で、「朝の三十分」と「夜の一時間」とが小話題として並置されている。文①の「人生における読書の時間」という、より一般的な話題が、それに続くより具体的な二つの小話題をまとめている。(7)の3文は、いずれも提

題表現を備えており、最小のレベルではすべて小文段を形成しているが、提題表現の規模や接続表現の統括方式から見て、頭括式の要約的中心文による文段と見なすことができる。

(8)は、文④が中心文で、文①～③を「ダカラ」という接続表現によって明示された「順接型」で統括する「尾括式」の文段である。文①と②が「ソテ」という添加型の接続表現によって接続しており、どちらも「…ト言う」という述語を持っていることから、省略された提題表現として、「ワレワレハ」といったものを補うことができよう。「ガ」という格助詞で明示された小話題があるが、いずれも「ワレワレハ」によってまとめることができる。次に、文③が「シカシナガラ」という「逆接型」の接続表現によって、文①と②とを統括している。さらに、文①～③の小文段を、文④の「ダカラ」が「結論的」中心文として「順接型」でまとめている。

より強い統括力を有する文には、明確な提題表現を伴うものが多い。たとえば、(8)の文④には「読書の時間がないトイウノハ」という提題表現があるが、「口実」にすぎないノデアルという文末の叙述表現と呼応して、「判断文⊖」¹⁹⁾による典型的な中心文を形成する。文③の「忙しい人モ」「自分の好きなことのためニハ」よりも強い統括力を持つ提題表現である。(7)の文①と②③との間にも同様の関係が見られる。

接続表現の統括機能は、提題表現や中心文の統括方式を外側から示唆するものとして見ることもできる。逆に言えば、中心文による統括機能の流れが接続表現の統括機能に反映しているともいえよう。

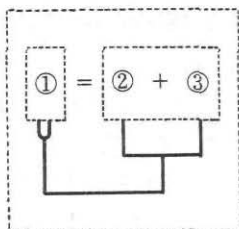
ここで、[表Ⅰ]による文の接続関係の符号を用いて、例(7)と(8)の文段の統括関係を図示してみると、[図1][図2]のようになる。文番号に○印が重複したものは、統括力の相対的な強さを示す。上向きのU印は統括の方向を示す。点線の四角で囲んだ枠は個々の文段を示すが、統括のU印が一個生じると、一個の文段が出てくる。なお、ここでは、さらに規模の小さい小文段については図示していない。

5.3. 中心文の統括機能と接続表現の関連

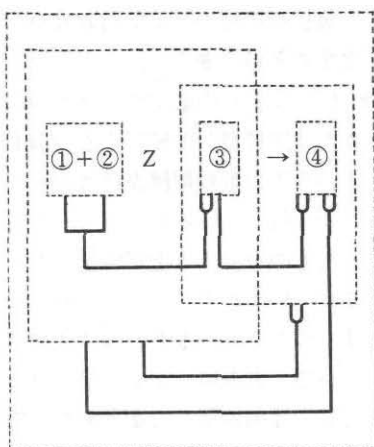
樺島(1983)による「キーセンテンス」のリストには、接続表現を含むものがあったが、ここでは、中心文の統括機能を整理し、その出現位置の違いがどのように接続表現の接続関係と関連するのかを検討する。

市川・樺島の指摘から、すでに「同列型」「順接型」「補足型」「連鎖型」の

[図1] 例の(7)文の接続の統括関係



[図2] 例の(8)文の接続の統括関係



「連係・見解付加」等の接続関係と中心文の出現位置とが明らかになっている。前件を p ，後件を q で示すと，それぞれの接続関係の示す統括の方向は次のようになる。これと永野(1986)の「文の接続関係による統括関係」とを比較してみると，一部にずれが認められる。(＊印を付けたものがずれのある接続関係である。)

- | | | |
|-----------|----------------------------|-------------|
| a. 同列型 | $p \supset q, p \subset q$ | (頭括式，尾括式) ＊ |
| b. 順接型 | $p \subset q$ | (尾括式) |
| c. 補足型 | $p \supset q, p \subset q$ | (頭括式，尾括式) ＊ |
| d. 連鎖型の連係 | $p \subset q$ | (尾括式) |

「 \subset ， \supset 」の記号は，それぞれ開いたほうにある文の統括力が相対的に大きいことを示す。また，ここには含まれていないが，前件と後件の統括力の大小に差のないものは，「 \cdot 」を用いて，「 $p \cdot q$ 」として示すことにする。[図1] [図2] の上向きのU印も同様に統括の方向を示すが，図式の方法によっては，上下左右の4方向に統括力の流れが表示される可能性もある。

ここでは，中心文の統括機能の種類を検討しておこう。まず，中心文の概念規定をより明確にしておく必要がある。野村真木夫(1987)は，日本語の「トピック・センテンス」には，次の4種類の機能があるとしているが，これは中心文についても考えられる。これは，野村の「パラグラフ」という概念が，むしろ「文段」に近い概念であることからわかる。

1. パラグラフの話題を提示する機能

2. パラグラフを開始または終了させる機能
3. パラグラフの論述観点を指定する機能
4. パラグラフの構造を指定する機能 (p. 36~7)

野村はそれぞれのパラグラフに典型的な文の叙述表現の種類を掲げているが、本稿では接続表現にかかわる中心文の機能として次の3類10種²⁰⁾を設けた。

1. 話題を開始する機能……………転換型
2. 話題を展開する機能
 - a. 話題を続ける機能……………添加型・順接型・逆接型
 - b. 話題を変える機能……………転換型・逆接型・対比型
 - c. 話題をさしはさむ機能……………逆接型・転換型
 - d. 話題をもとに戻す機能……………転換型
 - e. 話題をさえぎる機能……………逆接型・補足型
 - f. 話題をうながす機能……………添加型・順接型
 - g. 話題を言い換える機能……………添加型・補足型・同列型
3. 話題を終結する機能……………順接型・転換型

これらの中心文の機能の中には、接続表現以外の言語形式によって示されるものもある。しかし、その大半は接続表現によるものである。これらの機能は、文章中の各文段の機能であると同時に、文段中の中心文が主としてになる統括機能でもある。

平井昌夫(1984)は、「段落における有機的な統一」は「文の選び方と並べ方」によるという見地から、8項目の原則を掲げているが、その中で次の項目が「中心文」に関するものである。(以下、要点のみ示す)。

- a. すべての文はその段落の全体の考え(その段落の中心の考えで、中心文という)となんらかの関係を持っていなければならない。
- b. 中心文は中心文であることがよくわかる位置(その段落の初め、次に終わり)に置かれていることが望ましい。
- c. 段落の話題が明示されている文はその段落の意味の中心でもあるから、これを中心文と呼ぶ。
- d. 中心文とは、その段落で述べられている対象を表す文である。
- e. 中心文の性質も、文章そのものの表現目的や、その段落の性質によって、明示の仕方が異なる。
- f. 中心文の中心になる考えは性質が一様ではない。

さらに、中心文の性質の違いを次の6項目に整理している。

- (1) その段落の初めで取り上げる話題をたんに予告するだけの中心文。
- (2) その段落の初めで内容の概括をする中心文。
- (3) その段落の初めで内容のかなり細かな予告をする中心文。
- (4) 段落の初めの修辞法的な疑問文の中心文。
- (5) その段落の終わりで内容の要約をする中心文。
- (6) 中心文と考えられる文が示されていないことがある。 (p. 132~7)

(6)以外は、中心文の機能と出現位置の傾向を分類したものである。これは、市川や野村のものより詳しくなっている。(1)~(4)が頭括式、(5)が尾括式の文段になるが、それ以外の位置に中心文がくるものについては言及していない。(6)は零括式の中心文が潜在している文段と考えられる。この文段の前後の文段により強力な統括力をもつ中心文が明示されている可能性がある。平井も、中心文の見分け方については特に述べていない。例(9)は、平井が中括型のわかりにくい中心文を持った段落の例として挙げているものだが、はたしてどのようにして、文③が中心文だと判断するのだろうか。

(9)①「文学する」ということばは、いつごろできたことばでしょうか。

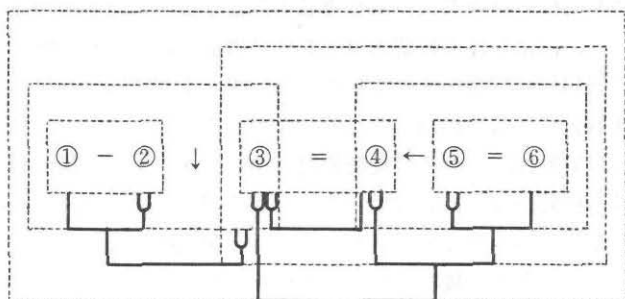
②とにかく新しい、まだよくなじめないことばのようであります。③普通に言われております「文学を愛する」よりも深く、もっと積極的に「心の中に文学を作る」という意味をもったことばと考えられるように思われます。④「心の中に文学を作る」といいますと、詩や短歌や俳句や、また小説などを書く、つまり「創作する」ということばと同じだと思われるかもしれませんが、それよりはなお広い意味をもつと私は思います。⑤もちろん、「創作する」ことも「文学する」ことのなかに含まれますが、「創作する」ことだけが「文学する」ことではありません。⑥たとえば、ある作品を読んで、その作品に感動した場合、読者の心の中にすでに「文学する心」が生まれていると、わたしは考えます。(田宮虎彦、「文学する心」)

(p. 130)

〔図3〕によると、平井の指摘する中心文③の統括力が最大で、6文全体の中心文として中括型の文段を形成していることがわかる。ただし、文段の統括機能が幾重にも重複しているため、中心文が中程に置かれると識別しにくいといった問題がある。また、相対的な中心文の統括機能の出現方式を単に「中括式」として押さえるだけで十分かどうかは、さらに検討しなければならない。

提題表現の統括から見ると、文①と④の統括機能が目立つ。これに対して、文③は、略題表現によって、文①の『「文学する心」』ということばへ」という

〔図3〕 例(9)の文の接続関係による統括図



主題を文②とともに引き継いでいる。接続表現による統括関係は、まず、文と①が②連鎖型の「応答」で、疑問文の課題に対する解答が述べられる形で、文①が②に統括される。文③は、転換型で、文①と②を統括する。文③と④は、同列型であるが、文③を文④が解説する形で、文③が④を統括している。文⑤と⑥も同列型であるが、文⑥の「タトエバ」による具体例が文⑤によって統括され、文⑤と⑥とが文④に補足型で統括されている。文③は最大の統括力を備えた文として、文段の中心文となり、「中括型」で例(9)の文段をまとめている。

〔図3〕の統括図から見ると、全体が6文からなる例(9)の文段に少なくとも7個の大小の文段が含まれている。文③には、全部で3つの文段が重なっており、文③に(9)の文段全体が統括されて、中括式の文段を形成している。

6. 接続表現の種類と統括機能

6.1. 接続表現の接続類型による種類

本稿では、主として文段の統括関係の手がかりとなる接続表現の種類を取り扱うが、その範囲は、通常、「接続詞」や「接続語句」といわれるものよりもやや広い範囲のものを対象とする。一例を挙げると、例(10)や(11)のように、1文全体で接続詞に相当する働きをするものなどを含めて考える。

(10) ここでちょっと見方を変えてみよう。

(11) なぜだろうか。

上の2例は、いずれも1文1段落の形式であるが、(10)は「トコロデ」、(11)

は「ナゼナラ」という接続詞と同じ機能を果たす、転換型と補足型の接続表現である。これらは、その前後にある複数の段落や節・章などをつなぐもので、言ってみれば、段落全体で接続表現としての機能をにうものだといえよう。接続する言語単位の規模が大きくなるにつれて、より強力で言語形式のサイズの大きい接続表現が必要になってくるのであろう。

森田良行(1989)は、この種の接続表現について次のように指摘している。

接続の語句がさらに長大化すると、連文の後続文がそっくり接続の語と
なってしまうか、そこまで行かなくとも、複文の従属句が接続語の役割を
果たすことになる。接続詞が語のレベルなら、接続語は文節ないしは連文
節のレベル、そして、ここでいう接続のキーワードは複文の「句」のレベ
ルなのである。(p. 192)

森田の「接続語」に相当するものが「接続表現」であるが、すべての従属句というわけではなく、ある程度形式化した、頻度の高い、かつ実質的内容よりも連文の相互関係を表す、文章の展開機能を有する表現形式にかぎられている。市川(1978)が「文をつなぐ形式」として挙げた、次のような項目が主な対象となる。

(a) 前後の文(あるいは節)相互を直接、論理的に関係づける形式。

①接続詞を用いる。

②接続詞的機能を持つ語句を用いる。

(f) 接続詞的に用いられる副詞・名詞。

(i) 接続詞的に用いられる連語。

③接続助詞を用いる。

④接続助詞的機能を持つ語句を用いる。

(c) その他の形式。

⑧前後関係を説明する表現を用いる。

(p. 52~6)

最後の「前後関係を説明する表現」の中では、次のようなものが文段の成立や相互関係の手がかりとして重要なものと思われる。

(12) ○「そのような理由で」「そのことのために」「そのことによって」

「この点から見て」(順接的關係の説明) →「ダカラ」

○「話題を変えることにして」「次に移りましょう。」(転換型の転移)
→「トコロデ」

○「これを別のことばで言い換えてみれば」「次のように言い換えてもよい。」「一言でいうならば」(同列型の換言) →「イイカエレバ」

○「これは次のような理由による。」「なぜこのようなことになったか
といえば」(理由・原因の補足) →「ナゼナラ」 (p. 55)

以上の例は、接続詞に準ずる表現であるが、文章・談話の資料の中に様々なバリエーションが見られる。比較的頻度が高く、接続機能の働く範囲の広い表現に注目してみた。

(13)～(17)は、談話資料の例であるが、→印の後にある接続詞に対応する。

(13) なぜかと申しますと、……。→「トイウノハ」(補足型・根拠付け)

(14) ま、これに対してですね、……。 (NHK 1「テレビコラム」)

→「一方」(対比型・対立)

(15) で、今言ったことを少し具体的に申し上げますと、……。

(16) え、一つの例をちょっとご紹介したいと思うんですが、……。

(NHK 8「テレビコラム」)→「タトエバ」(同列型・例示)

(17) で、このように見てまいりますと……。 (NHK 5「テレビコラム」)

→「シタガッテ」(順接型・順当)

次の(18)～(26)のように、2種以上の接続表現が重複して用いられる場合もある。初めの2例は同種、後の7例は異種の接続タイプの接続表現の組み合わせである。

(18) そして第二に、一茶は維然坊以来の口語俳諧の流れを汲むのだから、子供の話しことばを写すのは極めてあり得べきことである。(丸谷オ一、
「遊べや」)
[添加型+添加型]

(19) だからそう考えていくと、日本酒は世界でも珍しい酒であり、稀れなものなのであると思えてくるのである。(開高健、「いいサケ、大きな声」)
[順接型+順接型]

(20) ところがまた、方言に古語が残っていることはすこぶる多い。(丸谷、
「遊べや」)
[逆接型+添加型]

(21) ところで、そんなわけだから、八人の学者がネス糊で怪獣の子供をつかまへたというニュースには息づまるほどの衝撃を受け、四つの新聞の記事をそれぞれ三回ずつ読んだ。(丸谷、「平和」)[転換型+順接型]

(22) けれど、それにしても、帰り顔がすさまじい。(開高、「男・女・事前・事後」)
[逆接型+転換型]

(23) いずれにしても、しかし、それは読みかえることができるのである。(開高、「わが声、わが字」)
[転換型+逆接型]

(24) だからつまり、年賀状などという虚礼も成り立つわけである。(井上ひさし、「謹賀新年」)
[順接型+同列型]

(25) あるいはまた、東京に出ているときに、大地震に遭遇するおそれもある

れば、新幹線の大事故につきあってしまう可能性もないとはいえない。

(井上,「四百四病」)

[対比型+添加型]

- (26) こんなにややこしくは、詠み込み和歌でも作ってもらはない限りとても覚えられないが、なぜこんな話をはじめたかといふと、先日、高知へ行ってシンマイといふ出世魚の刺し身を食べたからだ。

(丸谷,「出世魚考」)

[逆接型+補足型]

- (27) そしてさらにまた出馬族は世間でもよく知られるように西瓜を食べる場合にとっても便利である。(井上,「出歯礼賛」)

[添加型+添加型+添加型]

文全体で接続表現をなすものとして、次のような例があるが、最後の3例は接続詞だけで文の形になっている省略表現の一種である。

- (30) その理由はいくつもあるが、ひとつだけ記そう。(井上,「自給自足」)

[補足型]

- (31) そこでわたしは次のごとき結論を下した。(井上,「奇矯浮薄」)

[順接型]

- (32) ひとつ書き残したことがある。(井上,「六法全書」)

[補足型/添加型]

- (33) それはこうであった。(井上,「美人薄命」)

[同列型]

- (34) とまあこういうわけだ。(井上,「自由自在」)

[順接型/同列型]

- (35) それともう一つ。(開高,「右手にガン、左手にタイプライター」)

[添加型]

- (36) そればかりではない。(井上,「謹賀新年」)

[添加型]

- (37) まだある。(井上,「小人閑居」)

[添加型]

- (38) となると……。(星新一,「ノックの音が」)

[順接型]

- (39) さらに……。(星,「ノックの音が」)

[添加型]

- (40) たとえば——。(井上,「夫婦円満」)

[同列型]

これらの表現は、いずれも、書き手（あるいは話し手）が一文一文を続けて、一まとまりの文章として表現する際の「道標」のごとき役割を果たす“discourse markers”と称される言語形式である。こうした接続表現が統括機能をもって、文段の中心文の所在を示す、文段の重層構造の形成にかかわっている。(30)～(36)の例の中にも、改行箇所位置するものが少なくない。これは、接続表現の統括機能が文段の成立に密接にかかわり、中心文の位置による文段の構造を示唆するためである。

接続表現は市川の文の接続関係の8種類によってほぼ分類できるが、文段の認定基準を考えるには、より具体的な統括機能による分類をする必要がある。次の例は接続関係による分類が比較的難しいものである。

(41) しかし、初日から気を失っていたのでは商売にならぬので、気付かぬうちに風船ガムなどを口中に含みつつ、まず一遍の歌を引用することから、この長い旅をはじめることにしよう。(井上、「前途遼遠」)

(42) 話が少し横にそれたが、私が特急などより停車駅を沢山持つ急行や鈍行を愛するのは、そのほうが旅の気分を味わえるからである。

(井上、「停車時間」)

(43) ①ここでまた注釈をつければ、私は「女子供を押しつけても自分だけは助かる」とするのはいけない、といっているわけではない。②どんな剛の者でも命は惜しい、それが自然な人情である。

(井上、「卑語運動」)

(44) 前回にひきつづき、私の古ぼけたノートから、めぼしいアイデアを抜粋してお目につけよう。(井上、「空理空論」)

(45) そこへ行くと、私の記憶力ははなはだあやふやである。

(井上、「記憶増進」)

(41)は、逆接型と同列型の接続表現があるが、「この長い旅をはじめことにしよう。」という、文章を開始する機能を持つ表現がある。広い意味では、(41)全体が文章の開始機能を持つ接続表現であるとも考えることもできよう。(42)(43)は、それぞれ他の話題を挿入する断りを述べた部分であり、それ以前の文脈を中断する機能がある。(44)は、「前回」という先行する文脈に続けて、同類の話題を展開することを予告する機能があり、添加型の一種と見ることもできるが、一方では、「今回」の文章を開始する機能もあるため、転換型の一種であるともいえよう。(45)の「そこへ行くと」は、前件に述べたことに対比する形で、後件の話題を引き出す対比型の一種ともいえるが、話題を変える転

換型や補足型のような用法も重なっている。

6.2. 接続表現の接続類型による文段の統括方式

接続表現を市川の文の接続類型によって分類し、各類型ごとに統括関係を検討し、文段の統括方式を整理してみる。前述した永野の「接続論にかかわる統括」の方式を、文段の認定基準として応用する可能性について考える。

接続表現による統括とは、文脈展開の流れの方向をとらえることである。拙稿(1987c・1988)でも、文章・段落の文脈の展開を文の接続関係による統括方式の観点を導入して分析したが、個々の文章例を取り上げただけで、文の接続類型すべてについて検討したわけではない。本稿では、永野説と食い違い統括方式に焦点を当てて、整理してみた。

Aの3類型は、特に問題はなく、永野説と一致する統括方式になる。

A①順接型——尾括式 ②逆接型——尾括式 ③添加型——零括式・尾括式

Bの接続類型については、さらに検討の余地がある。下線を引いた類型は新たに付け加えたものだが、事例によって考えてみよう。

B④対比型——零括式・尾括式 ⑤同列型——頭括式・尾括式・零括式

⑥補足型——頭括式・尾括式 ⑦転換型——頭括式・中括式・尾括式・

零括式 ⑧連鎖型——尾括式・頭括式・零括式

ここで、問題になるのは、文の接続関係は前後2文の間だけの論理的关系を示すものであるため、必ずしも文段の構造類型をすべて網羅するわけではないということである。「中括型」と「両括式」の場合は、少なくとも3文以上の文集合体でなければ出てこない。また、「零括式」の場合は、当該の文段の前後に、比較的統括力の強い文段が位置すると予想されることから、むしろ接続類型相互の関係が問題になる。「零括式」の出てくる「添加型」「対比型」等は、一文段の中で他の接続類型によって統括される形が多い。

このほか、文章全体の構造を考える際には、統括が分散して複数存する「散括式」も含める必要がある。提題表現の統括と同様に、接続表現の場合も「統括の重層性」が認められるためである。接続表現が文章中のどことどこをつないでいるかを「機能領域」というが、文段の統括関係を見るには重要な観点である。「機能領域」の広狭と接続表現による統括力の大小とは、一般に相関関係がある。

- (46) ①イギリス人にいわせると、コニャックは石鹼の匂いがするそうである。②いっぽう、フランス人にいわせると、スコッチは南京虫の匂いが

するのだそうである。③そんな悪口をいいあいながらおたがいにコニャックとスコッチを大量に輸入しあって、せっせと飲んでいる。……

(開高,「ペンと肝臓」)

- (47) ①そして、たしか十年くらい前に、いま使っている紙を八千枚、特別注文でこしらえた。

②八千枚といえば、ずいぶん厩大に聞えるが、一年にならせば八百枚、一月なら七十枚足らずだから、大したことはない。③むしろ私がいかに不勉強であったかというシンボルのようなものだ。

(安岡,「先輩の忠告」)

(46)は対比型の零括式の例だが、文①と②が文③の添加型による尾括式で統括されている。(47)は、文③の対比型によって、文②が統括される尾括式の例である。文①と文②③とは、連鎖型の連係「見解付加」による尾括式のより高次の文段を形成する。

- (48) ①私になんら気が咎めることなくして大酒が飲めた期間は、いまから考えると、非常に短かったようだ。②すなわち、私の「一人前の時」は、きわめて短かった。(山口,「年齢」)

- (49) ①年をとると、思い掛けないことが気になりだすものだ。②たとえば先頃亡くなった武田泰淳さんの追悼号に奥さんが、武田は無駄づかいをしなかったのでお金の心配はせずに病室は特等室を借りられたというのを読んで、私は急に自分に何の貯えもないことが心細くなってきた。…

(安岡,「老いこむ」)

- (50) ①ある。②ある。③四十万円、五十万円の銘品は珍しくない。

(開高,「銘品さがし」)

(48)～(50)は同列型の例だが、統括方式は、それぞれ尾括式・頭括式・零括式になる。(50)はやや特殊で、接続表現が明示されていないが、「アル」という動詞の反復表現によって、零括式になり、文③の添加型による尾括式の統括関係を有する小文段である。同列型の中には、様々な接続表現が含まれており、下位区分や個々の接続表現によって異なる統括関係が見られる。これらは、文段の機能的側面から見ると、重要なものが多い。

補足型の場合は、下位区分の「根拠付け」と「限定」とで統括関係が異なっており、前者(51)は頭括式であるが、後者(52)は尾括式の例である。

ある。

- (51) ①よく考えてみると、北を向いているつもりで、じつは南を向いてい

た。②というのは、種を明かせば、単純なことで、南半球では東から出た太陽が北をぐるっとまわって西へ入る。③日本のように北半球だと、東から昇った太陽は南をまわって西へ沈む。④正反対だった。⑤小学生でもわかる話ですが、それが実感としてわからないことがある。

(多田道太郎,「自分学」)

- (52) ①出来上がった家は、よい設計で、設計家も満足の様子である。②ただ、応接間に暖炉ができていた。③べつに違和感を与えるほどのものではなく、つまりは趣味の問題で、暖炉のある家に住みたいとおもっている人もあるだろうし、そのことは構わない。④ただ、私の趣味ではない。⑤なにか、大袈裟な感じがする。(吉行,「弁解のいる暖炉」)

(52)の場合は、文②と④に「ただ」という補足型の「限定」の接続表現があり、いずれも基本的には尾括式であるが、この例では、文段①～③、③～⑤の中央部に位置して、中括型のような働きをしている。最終的には、文④の統括力がもっとも大きく、これが(52)全体を統括している。

(53)は転換型、(54)は連鎖型の例であるが、いずれも基本的には、尾括式のものだといえよう。転換型については、特に文段の指標としての機能が注目されるが、永野の指摘するように、いくつかの文接続の冒頭・中間・末尾に転換型がくるかによって、頭括式・中括式・尾捉式になる可能性がある。連鎖型では、[連係]の下位区分や、[引用関係][応対]等の場合は、頭括式や零括式の可能性もある。

- (53) ①もしも、大そう悔いる気持ちを感じるとすると、これは字引馬鹿になってゆくおそれがある。②ほどほどに辞書を引いて、ときどきおどろくあたりがいいようだ。

③いずれにせよ、自己流の解釈を、たしかめないで公表すると、悔やむことが多いことだけはたしかである。④とくに、私の場合、解釈してみせると、かならず違っているようである。(吉行,「辞書を引く」)

- (54) ①数年前、杉並と中野の境のところにあるアパートに引越した。②七階建てのアパートの五階で、ぼくの仕事部屋の窓から首を出すと、ちょうど真下に、中野十貫坂といふゆるやかな坂が見える。

(丸谷,「十貫坂にて」)

(53)は、文①と②の同列型の零括式から、話題を「解釈」の問題へと転換させており、文③が尾括式の転換型で統括している。さらに、文③によって、文④の同列型「とくに」が頭括式として統括される。文①～④の文段としての統

括を考えると、文③が中心文となって、転換型の中括式の統括関係を形成している。(53)には、提題表現と接続表現の統括から見ると、文①～②、①～③、③～④、①～④という4つの文段が含まれている。

(54)は、文①から導かれる提題表現の「そのアパートへ」が、文②に略題表現の形で受け継がれており、接続表現なしで連鎖型の尾括式の文段になっている。文①の話題提示文に対する「関係の解説付加」が1文段を形成している。文②の統括力がより強いということは、文③に「原稿書きがいやになると外を眺めては」という表現があることからわかる。ちなみに、文②と③の接続関係も連鎖型の「関係」になっているが、普通、連鎖型の「関係」は文段の内部に位置することが多い。(54)のように、一応、文段として成立したものであっても、統括力が弱く、他の文段によって統括されるものが多い。

(55)は、随筆の末尾部に一行あけて添えられた添加型の連続する文段の例であるが、統括関係の方式と文段の統括による重層構造について分析した結果を[図5]に示す。

(55) ①まだ枚数が余っているので、「いろは」にかけて即席のなぞを一つ。

②「いろはにはへととかけてわが家の家計のごとく」。③心は「散りぬる」前だ。

④まだすこし紙数が余っているので「いろは」と関係のないなぞなぞを附録につけよう。⑤「来年の生活とかけて糊のきいたワイシャツととく」。⑥「心はコワゴワ」

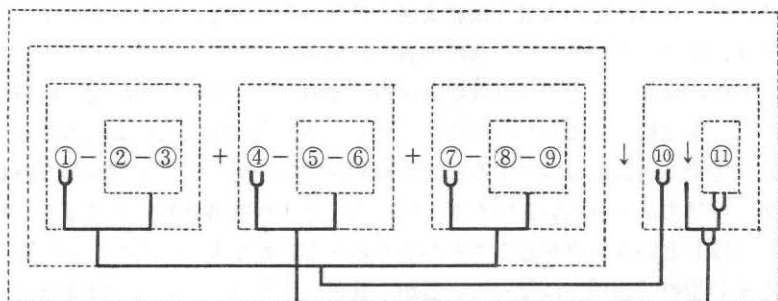
⑦まだわずかに紙数が残っているのでなぞなぞの第二附録。

⑧「今年の庶民生活とかけて水俣病患者の病状ととく」。⑨「心は、聞けば聞くほど涙が出る」

⑩まだ紙数が……もう残っていない。⑪それではみなさん、よいお年を。(井上、「有為転変」)

(55)では、文①、④、⑦に「紙数」に関する添加型があるが、それぞれ各文段の中で、頭括式の統括関係を形成している。文②③、⑤⑥、⑧⑨は、それぞれ連鎖型の「引用関係」と「関係」で、添加型の文①、④、⑦を中心文とする文段を成立させる。文⑪は、「ソレデハ」という転換型の接続関係によって、文⑩を尾括式で統括する。文⑩は、文頭では添加型のように書き出しているが、文⑪から文脈が転換している。

〔図4〕 例(55)の文の接続関係による統括図



6.3. 接続表現の統括の機能領域と文段の区分の重層性

例(40)は、接続詞のみで1文となるものであったが、ここでは、接続表現の統括機能の及ぶ範囲（機能領域）と文段の区分の重層性について検討する。

(40) A①日本語では、「うちは夫婦円満で……」などというのは禁句である。

B②「あいつ、手放しでのろけてやがる。馬鹿じゃなかろうか」と陰で言われるにきまっているからだ。

C③「いやもううちの女房ときたらひどいもので、まあなんとかかんとかやっていますよ」

D④こう答えてにやにやしているのが、利口な態度というものだろう。

E⑤しかし、ひどい女房だからこそ円満に行っている場合もあるので、わが家などはその典型である。

F⑥たとえば――。⑦この三月二十一日の朝、私はさる出版社の会議室からふらふらしながら帰ってきた。⑧前日、女房から、「明日は午後一時十二分発の新幹線ひかり号で名古屋へ行ってください。
……
(省略)

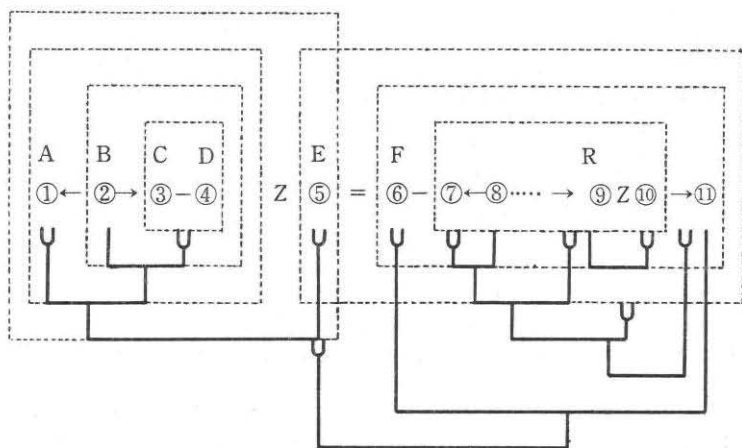
R⑨わたしは売場の電話を借りて女房を怒鳴りつけた。⑩が、間違いや勘ちがいも、ここまで徹底すると滑稽至極、怒鳴っているうちにわたしは笑い出していた。⑪こんなわけで、結構たのしく笑って暮らしている。

文⑥の「タトエバ」の統括機能の及ぶ範囲をみると、後件の機能領域はおそらく末尾部のR段落の最終文⑪まで及んでいる。前件としては、文⑤からが一応考えられるが、さらに冒頭部の第①文まで及ぶと解釈することもできる。文

⑧以下の(省略)された部分には、妻の勘違いによる筆者の名古屋行き失敗談が全17段落にわたって説明されており、文⑦以下最終文⑪にいたる文段全体が文⑥「例えば——」を受けた文⑤の具体例になっている。

この文章の冒頭部の4段落は、文①の話題提示を文②～④が補足型によって根拠付けており、段落Aが段落BCDを頭括式によって冒頭部の一文段にまとめている。それを、文⑤の「シカシ」が逆接型の尾括式で統括し、主題を提示する。文⑥の「タトエバ」以下の長大な文段が同列型によって文⑤を具体化し、それらが文⑤によって統括されている。すなわち、文⑤が文章中で最も統括力の強い主題を述べた中心文になるが、文章全体としては、文⑤が全体をまとめる中括型の構造である。文⑥の「タトエバ」の機能領域から中括型の文章構造類型を把握できることから、接続表現の統括機能が文章の成分である文段の認定基準として有効であるということがわかる。[図5]は例(40)の文章構造の概略を示したものである。

〔図5〕 例(40)の接続関係による統括図



7. 接続表現による文段の統括の重層性

以上、接続表現の種類や文の接続関係による文段の統括方式について考えてきたが、本稿では文段の成立の問題の一部を取り上げたにすぎない。先に論じた提題表現や中心文による統括機能と、接続表現との間に密接な関連があるということにも若干触れたが、文章の展開機能による文段の分類や文段の相互関

係から生じるより複雑な統括方式の検討など、残された課題は少なくない。また、接続表現の明示されない文間文脈の接続関係の判定方法も大きな課題の一つである。

今後の課題としては、叙述表現・指示表現・反復表現・省略表現等の新たな文段の認定基準による統括方式を検討するとともに、各認定基準の相互関係を明確にする必要がある。さらに、文章の種類の違いによる文段の機能の種類や中心文の形式と機能についても整理し、文章の成分としての文段の性質・構造を記述していくことになるだろう。

註

- (1) 「文段」の定義については、市川(1987:126)の次の規定に従う。
「文段とは、一般に、文章の内部の文集合（もしくは一文）が内容上のまとまりとして、相対的に他と区分される部分である。」
- (2) 「提題表現」とは、文の「主題」「話題」「主語」等と言われるもののことで、提題助詞の「ハ」に代表される言語形式を備えたものである。拙稿(1987a)では、「文章の主題」に通じる表現として、永野(1986)の「主語の連鎖」の観点に「統括機能」を導入して、文段区分の一指標とした。
- (3) 市川(1978:52~57)に「文をつなぐ形式」としてあげられた3類12種の言語形式を指す。「提題表現」「接続表現」もその中に含まれる。「接続語」ともいう。
- (4) 市川(1978:58)の(注)に、「接続語句は、『接続のことば』と呼んでもよいもので、関係する範囲が広い。」とあるが、「接続詞・接続助詞及びこれらと同じような機能を持つ語句の総称」である。「接続詞」は品詞名、「接続語」は文の成分の名称で、「接続語句」「接続表現」は文章論の用語である。「接続表現」のほうが「接続語句」よりさらに広いが、指示語は含まない。
- (5) 「文の接続関係」は、2文間の意味的なつながりを類型化したもので、接続表現が指標となって分類される。拙稿(1983)の諸説一覧、参照。
- (6) 文章論の位置付けをめぐる、全面的に文法論とする立場、部分的に文法論とする立場、文法論と認めない立場の3つの考え方があるが、永野は積極的に文法論としての文章論を志向している。拙稿では、文章論と文法論は相互補完的なものとしてとらえている。
- (7) 市川(1978:156~7)の用語を参考にして、拙稿(1987b)では、「頭括式」「尾括式」「両括式」「中括式」「散括式」「零括式」の6種を用いた。文段と文章の統括方式による構造類型として設けた。
- (8) 「統括の重層性」は、永野(1986:318)の規定によるものだが、市川(1978)は「段落・文段の重層構造」について論じており、拙稿(1987a)では中心文の統括力の大小によるものとして「重層構造」を分析した。
- (9) 塚原鉄雄(1966a/b)は、「論理的段落」を文法論的単位として、「修辭的段落」と区別するが、本稿の「文段」の考え方はこれに近い概念である。ただし、塚原が「基本段落」を一文とする点は異なる。
- (10) 永野(1986:105)に「展開型」としてあげられている例であるが、市川説により、(1)は添加型、(2)は連鎖型、(3)は順接型として扱うことにする。「展開型」は「前の文の内容を受けて、後の文でいろいろに展開させる関係」と、曖昧に定

義されている。

- (11) 市川(1978: 92~3)に「連鎖型」は、「前文内容に直接結びつく内容を後文に述べる型(接続語句は普通用いられない)」とある。下位区分として、[連係][引用関係][応対][提示的表現との連鎖]の4種類が含まれる。
- (12) 西田(1986: 64~5)に、「(9) 先行文と後続文とが異なる段落に属している場合」を、「(A) 話題に一貫性がある場合。文脈は当然一貫性を持って進展する。」と「(B) 話題に一貫性がない場合。先行文と後続文の間に文脈の一貫性はない。」とを区別するが、問題は話題の一貫性をどう認定するかにある。提題表現による統括もその有効な観点の一つである。
- (13) 拙稿(1987c)の社説50文章のデータでは、408段落のうち、78段落が区分箇所接続表現を持っていた。19.1%であるから、雑誌記事よりは出現率が高い。接続表現の明示されない文間文脈については、「連鎖型」の区別と接続表現の想定作業の客観性が問題になる。
- (14) 永野(1986: 320~2, 327)参照。
- (15) 拙稿(1987a: 103~111)参照。
- (16) 拙稿(1978)・野村真木夫(1987)参照。
- (17) “Key Sentence”は、「トピック・センテンス」と同種のものとして扱われる。
- (18) “Key Word”の定義ははっきりしない。文章論の分野では、「繰り返し語句」「反復語句」「主要語句の連鎖」等の観点の分析があるが、「キーワード」もこれらの概念に一部重なる。
- (19) 永野(1986: 133~231)「主語の連鎖」参照。「判断文」とは、「体言+は+体言+だ」の形を取る文であるが、そのうちで、述語が「——である」「——用言 現在形」のものを「典型的判断文」として、「判断文①」と「判断文②」とを区別する。
- (20) 藤村・佐久間(1990)による「ケース2 接続表現(2)」参照。

引用参考文献

- 安達 隆一 1987『構文論的文章論』(和泉書院)
- 藤村知子・佐久間まゆみ 1990「ケース2 接続表現(2)」(『ケーススタディ 日本語の文章・談話』, 桜楓社)
- 土部 弘 1962「文章の展開形態」(『国語学』51集, 国語学会/
1979 山口仲美(編)『論集日本語研究8文章・文体』, 有精堂) p. 58~69
1973『文章表現の機構——国語教育の実践原理を求めて——』(くろしお出版)
- 市川 孝 1978『国語教育のための文章論概説』(教育出版)
- 樺島 忠夫 1983「4文章構造」(『朝倉日本語新講座5 運用I』, 朝倉書店)
p. 118~57
- 松下 厚 1977『日本文学の体系』(明治書院)
- 森田 良行 1989「II連文型」(『談話の研究と教育II』国立国語研究所) p. 112~99
- 森岡 健二 1969『文章構成法』(至文堂)
- 永野 賢 1986『文章論総説』(朝倉書店)
(編) 1986『文章論と国語教育』(朝倉書店)
- 長田 久男 1984『国語連文論』(和泉書院)
- 西田 直敏 1986「文の接続について」(『日本語学』5巻10号, 明治書院) p. 57~65

-
- 1988「段落とその接続について」(『日本語学』7巻2号, 明治書院)
p. 41~9
- 野村真木夫 1986「パラグラフにおける文の展開をめぐる」(『表現研究』44号,
表現学会) p. 11~8
-
- 1987「現代日本語のトピック・センテンス——パラグラフ論への試み(1)
——」(『弘学大語文』13号, 弘前学院大学国語国文学会) p. 36~45
- 佐久間まゆみ 1978「トピック・センテンス考」(『人間文化研究』1号, お茶の水女子
大学大学院人間文化研究科)
-
- 1983「文の接続——現代文の解釈文法と連文論——」(『日本語学』31巻
14号, 明治書院) p. 33~44
-
- 1986a「段落づくりの要領」(『国文学 解釈と教材の研究』31巻14号,
11月臨時増刊号「文章表現セミナーA-Z」, 学燈社)
-
- 1986b「文章構造論の構想——連文から文段へ——」(『文章論と国語教育』,
永野 賢(編), 朝倉書店)
-
- 1987a「文段認定の一基準(I)——提題表現の統括——」(『文藝言語研究
言語篇』11号, 筑波大学文芸・言語学系) p. 89~135
-
- 1987b「論説文の文章・文段構造と要約文の類型について」(『日本語論集』
2号, 筑波大学留学生教育センター) p. 1~29
-
- 1987c「段落の接続と接続語句」(『日本語学』6巻9号, 明治書院)
p. 46~55)
-
- 1988「文脈と段落——文段の成立をめぐる——」(『日本語学』7巻2号,
明治書院) p. 27~40
- 時枝 誠記 1950『日本文法 口語篇』岩波書店
- 塚原 鉄雄 1966a「文章と段落」(『人文研究』17巻2号, 大阪市立大学文学会)
p. 1~32
-
- 1966b「論理的段落と修辭的段落」(『表現研究』4, 表現学会/
1979 山口仲美(編)『論集日本語研究 8文章・文体』, 有精堂) p. 70~78